

三島由紀夫「禁色」論

——記紀への遡及——

九 内 悠 水 子

はじめに

「禁色」(昭26・1～10『群像』、昭27・8～同28・8『文学界』)は、第一部の原題を「禁色」、第二部のそれを「秘薬」として発表された三島前期の長編小説である。第一部と第二部の間には約十ヶ月の中断があり、それを含めて四年近い歳月が費やされている。この約十ヶ月の中断時期に、三島は初めての海外旅行を経験する。父梓の友人で朝日新聞出版局長であつた嘉治隆一の尽力により、同社特別通信員の資格を得て、横浜を出航し、ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、マイアミ、プエルトリコ、リオデジャネイロ、サンパウロ、ジュネーブ、パリ、ロンドン、アテネを巡りローマに至る、五ヶ月近い長旅で

あつた。この旅行の模様は、「北米紀行」(昭27・4『群像』)、「南米紀行—ブラジル」(昭27・5『新潮』)などと題していくつかの雑誌に発表された後、評論随筆「アポロの杯」(昭27・10 朝日新聞社)として刊行されている。

三島はこの時期について「私の遍歴時代」⁽¹⁾で次のように述べている。

——当時の外遊は、前にも言つたやうにめづらしかつたので、文士が外遊すると、「おみやげ小説」を書くのがならひになつてゐたが、私はそんなものは書くまいと決心して、大方の原稿をことわり、数ヶ月を心の準備に費しつつ、「真夏の死」といふ、純然たる日本の出来事の小説を書いた。

書きながら、自分の仕事の一時期が完全にをはつて、次の時期がはじまるのを私は感じてゐた。帰国後に書いた「禁色」第二部は、第一部と截然とちがつてゐる。私の仕事はだんだん遅くなり、その遅くなる度合について、自分が成熟してゆくかのやうに感じた。

三島自身が指摘するように、第一部と第二部では物語の方向性が大きく変わつてゆく。そしてそれは彼が当初予定していたものではなかった。小説の長さも、ストーリー展開も、作者の「プランから逸脱」した⁽²⁾末に完成した「禁色」は、その成立事情ゆえに、奥野健男が指摘する「矛盾」⁽³⁾や井上隆史が指摘するような「曖昧さや荒々しさ」⁽⁴⁾を内包せざるを得なかったのである。三島が四年という歳月を費やし、自己のあらゆる才能を注ぎ込んだにも関わらず、野心的な失敗作に終わってしまった。しかし同時に「禁色」は、「そこに彼は『精神性の喜劇』という年来のモチーフも、さらに美的創造者でありかつ美の体現者であるというもつとも根源的なモチーフも、芸術論も、秘められた性的願望も、美的趣味も、社会風俗も、小説方法の実験も、近代日本文学批判もすべて投げこむ」⁽⁵⁾と奥野が指摘するように、三島文学の根底に関わる様々な問題を提示している。「小説の玩

具箱」に詰め込まれ、埋もれてしまったそれらの問題は、いかなる形で以降のテクストに関わつていったのだろうか。「仮面の告白」(昭24・7 河出書房)と並び前期の代表作である「禁色」は、大作「にもかかわらず、遠眺めされた秘境のように、あまり話題に上らない、不遇な(従つてそれだけ手付かずの宝庫であるような⁽⁶⁾)」扱いを受けてきた。近年『三島由紀夫研究』で特集が組まれ、再び注目されてきてはいるものの、未だ「手付かず」の部分も多い。特に、俊輔と悠一を中心とした男たちの分析に対して、康子や鍋木夫人を中心とする女たちのそれは手薄であるように思われる。たしかに「禁色」は、男色を中心テーマに据え、俊輔と悠一という二人の主人公を軸に物語が展開している。しかしながら、女たちの存在も看過できない。例えば鍋木夫人の存在は、作者自身さえも制御出来ぬ力⁽⁸⁾となつて物語内に君臨していく。そもそも夫人は、『群像』連載時の第一部において、夫と悠一の「怖ろしい場面」を目撃し、自殺するという設定⁽⁹⁾になっていた。

明る日の夕方、湯河原の旅館から電話があつて鍋木夫人の死を知らせて来た。モルヒネを含有するパピナールを呑んだのである。この品のよい鎮痛剤は、致

死量を呑んでも僅々十分で安らかに眠れるのである。

信孝は悠一を伴つて、夫人との新婚の第一夜の宿であるその湯河原の馴染の旅館へかけつけたが、信孝は往きの車中を泣きつづけ、遺骸の傍らに、見るべきでないものを見たといふ趣意の、簡単な走り書の遺書を見出したとき、さらに大声を上げて哭いた。悠一はこの奇妙な夫婦愛のあらはれを前にしては、彼自身の甚だ自然な涙の介入の余地がないことに茫然とした。

ところが三島は、第一部完結の翌月に「一旦発表したものを改訂するのは好ましからぬこと」と断りつつも、「いろいろ考へた末」訂正するという旨の「改訂広告」(昭26・11『群像』)を出す。これによりパビナールで自殺した鍋木夫人は蘇りを遂げることになった。一方その復活に伴つて、代わりに力を失つていった俊輔は、皮肉にもその同じパビナールで自殺する運命を辿るのである。

このような二人の関係は、「禁色」を読み解く上で重要な視点となるだろう。次項ではまず、俊輔に対する鍋木夫人の位置を見定めてみたい。

一、「精神上の」父と母

「禁色」は、結婚が「三度とも失敗に終つた」、齢七十にならんとする檜俊輔が、孫ほどでも年の離れた瀬川康子を追つて伊豆半島の温泉地へと向かうところから始まる。そこで彼はのちに康子の夫となる南悠一と出逢つた。それまでの人生の中で、幾度となく女に苦しめられてきた俊輔は、五十万という金と引き換えに、天性の美貌を持ちながらもけつして女を愛することの出来ない悠一を使つて、女たちへの復讐をしようと目論む。第一部では俊輔の復讐は一見成就したかのように見えた。しかし第二部に入ると、その綻びが徐々に広がっていく。

「君が罪だと思つてゐるもの、そのために君が苦しみ後悔に責め立てられてゐるもの、そんなものは何だ。悠ちゃん、活眼をひらきたまへ。君は絶対に無辜なのだ。君は欲望によつて行動したわけではないんだ。罪は欲望の調味料だよ。君は調味料だけ嘗めて、そんな酸っぱさうな顔をしてゐるんだ。康子と別れて君がどうなりたいと思ふんだね」

「自由になりたいんです。僕は本当をいふと、どうし

て自分が先生の仰言るとほりになつてゐるのか自分でもよくわからないんです。僕は意志がない人間かと思ふと淋しいんです」

この凡庸な無邪気な独り言は、迸つて、たうとう切実な叫びになつた。青年はかう言つたのである。

「僕はなりたいたんです。現実の存在になりたいんです」

俊輔は耳をすました。それは彼の芸術作品がはじめてあげた嘆きの声を聴くやうに思はれた。

はじめは「精神上の」息子として忠実に役割を果たしていた悠一が、「現実の存在になりたい」と俊輔の呪縛から逃れることを考え始めたことで、その関係は少しづつ変化していく。俊輔と悠一との力関係は次第に逆転していき、最後に俊輔は自殺という選択をする。その彼と入れ替わるやうに物語の中で存在感を増していったのが鍋木夫人であつた。悠一が俊輔を必要としないためには、彼の呪縛を脱し「現実の存在」になるためには、夫人の存在が必要不可欠だつた。俊輔の「精神上の」息子であることをやめる、すなわち俊輔という「精神上」の父を不要のものとしていった悠一にとって、鍋木夫人が担うところの「精神上の」母

が必要になるのである。鍋木夫人は第二部に於いて、悠一に訪れた最大の危機を救うべく颯爽と再登場する。彼が男色者であるという秘密は、稔の養父福次郎が母や康子に出した密告の手紙によつて知られるところとなつてしまつたのだが、ここで、窮地に陥つた悠一は、俊輔ではなく鍋木夫人に助けを求めた。電報で呼び出された夫人は、特急で上京し、かつて自分を「膝まづかせた」男の為に一肌脱ぐことを約束する。悠一と夫の「怖ろしい場面」を目撃し自殺さえ考えたにもかかわらず、彼女は、悠一と自分とのありもしない情事を白状し、贖物の証人となつたのである。しかも夫人の強引な、「超人的な力業」はこれに留まらなかつた。彼女は、悠一を癒す為と称して、彼を連れて旅行へ行くことを悠一の母に宣言する。一方の悠一の母は混乱していた。彼女は、息子の男色という「無教養で下品な事柄」が否定できるなら、「有夫の女と有婦の男とのこんな情事」は是認しようと考えていることに気づき、「道德觀念が故障を起したらしいのにひどくうらたへ」る。結局彼女は、混乱のうちに母としての役割を鍋木夫人へ譲渡してしまい、全てを託して息子を送り出すのである。

このように「禁色」では、悠一の「精神上の」父としての俊輔に対し、「精神上の」母として鍋木夫人が配置されて

いる。夫人の造型については既に、高橋新太郎⁽¹⁰⁾などによって「母性」というキーワードでの分析がなされている。また、田中美代子や中元さおりは、鍋木夫人の「母性」に対する康子の「聖母性」を指摘する。だが康子に「聖母性」を認めることが果たしてできるだろうか。確かに、息子の同性愛者という事実を拒否しようとした姑に対して、康子がこれを許容しようとする箇所には、彼女の「聖母性」が垣間見られる。しかしながら、事を収めようと悠一が鍋木夫人に助力を頼む、すなわち康子を「相対的な愛の世界へと引きずり下ろし」たことで、彼女は「精神的な聾啞者」となってしまった。悠一を遮断した彼女は、全てを赦し見守る「聖母」的な役割を自ら放棄しているのである。以下本稿では、「精神上の」母として、鍋木夫人のみを想定していくことにする。

ところで「精神上の」父俊輔、息子悠一、「精神上の母」鍋木夫人に見られる、擬似親子の関係は三島の他のテクストにおいても散見される。例えば、疑似父子の関係は、中期のテーマであった。三島は次のように述べている。⁽¹³⁾

この数年の作品は、すべて父親といふテーマ、つまり男性的権威の一番支配的なものであり、いつも息子か

ら攻撃をうけ、滅びてゆくものを描かうとしたものです。「喜びの琴」も「剣」も、「午後の曳航」もさうだった。

ここに挙げられている、「喜びの琴」(昭39・2『文芸』)の松村と片桐、「剣」(昭38・10『新潮』)の木内と次郎、「午後の曳航」(昭38・9 講談社)の龍二と登、「絹と明察」(昭39・1・10『群像』)の駒沢と岡野などを見て分かるように、三島が父というテーマを描くとき、いわゆる生物学上の父ではなく、「精神上の」父を想定していることが多い。⁽¹⁴⁾「禁色」もその一つである。

一方疑似母子の関係は、父子の場合と比べ、些か複雑である。何故なら恋愛対象としての女に、同時に母の役割が附せられることが多いからだ。三島のテクストには、年上の女と年下の男の恋愛関係が多く描かれ、またその中でも、恋愛を含め、あらゆる事に対し男をリードしていく女性上位の関係が頻出する。「禁色」の他、「薔薇と海賊」(昭33・5『群像』)の阿里子と帝一、「鏡子の家」(昭34・9 新潮社)の鏡子と夏雄、あるいは収と清美、「春の雪」(昭40・9・42・1『新潮』)の聡子と清顕、「奔馬」(昭42・2・43・8『新潮』)の楨子と勲、などがそうである。例えば

「春の雪」の聡子は清頭と二歳しか違わないが、彼女は時に彼を母のような目差しで見ている。

「子供よ！ 子供よ！ 清様は。何一つおわかりにならない。何一つわからうとなさらない。私がつと遠慮なしに、何もかも教へてあげてゐればよかつたのだわ。ご自分を大層なものに思つていらしても、清様はまだただの赤ちゃんですよ。本当に私が、もつといたはつて、教へてあげてゐればよかつた。でも、もう遅いわ」

このように「禁色」に見られる「精神上の」父母と息子の關係が、他のテクストにも継承されているということは、この問題が、三島にとつて重要なテーマの一つであつたことを意味していると言えるだろう。この「精神上の」父母という観点をもう少し掘り下げてみたい。

二、記紀への遡及

先述したように、鐫木夫人は、贗物の証人となつた後、悠一を連れて旅に出る。その行き先は、夫人が「京都へかへる序でに」寄つてみたかつたという「伊勢志摩地方」で

あつた。

窓はあまねく展^{ひら}かれてゐるのに、そよとの風もなかつた。伊勢志摩地方の名高い夕風である。毛織物のやうに重く垂れた燃えさかる大気も、身も心ものびのびとした若者の健康な休息を、さまたげてはゐなかつた。水泳と入浴のあとの全身の快さ、蘇生の感覚、すべてを知つてすべてを恕してゐる傍らの美しい女、適度の酩酊、……この恩寵^{おんこう}にはまるで瑕瑾がなく、傍らの者を不幸にしかなないほどであつた。

この旅行において鐫木夫人は、決して女を愛さない、愛せない悠一を前に自らの感情を押し殺し、「乳母」という役割を全うする。「すべてを知つてすべてを恕してゐる傍らの美しい女」という悠一の願望を演じきることゝ夫人は、彼にとつて「この世に唯一人安心して相共に語るに足る女」だという立場を得たのである。一方の悠一も、この地で心から癒された。女から「乳母に身を落とした」鐫木夫人は、一緒に部屋を取りながらも彼に手を伸ばすことはしなかつた。夫人の庇護により、母や妻康子から同性愛者の烙印を押されるという「不名誉」な危機を脱した彼は、この旅行

によつて「夜」の恐怖からも救われたのである。

ところで、この二人の旅行先「伊勢志摩」と言えば、「潮騒」(昭29・6 新潮社)がすぐに想起されよう。

巨大な松のそり立つた大王崎の眺望はすばらしく、二人は潮風に吹きまぐられながら、海のそこかしこに白い波頭のやうにみえる白衣の海女のなりはひや、北方の岬に一本の白墨を立てたやうにみえる安乗の灯台や、老崎の海女のたく火が汀々にあげてゐる煙を見た。

左にあげたのは、「禁色」における悠一と夫人の観光の模様であるが、「潮騒」のヒロイン初江はじめ、「老崎の海女のところ」に養子にやられていたのである。柴田勝二⁽¹⁵⁾は、「潮騒」において、新治たち漁師の「信仰の拠点である八代神社が伊勢神宮と深い縁を持つ神社である」ことに着目し、海神と天照大神との連関を読み解く。そして、伊勢神宮の神饌の中でも最も重要視されていた鮎を取ることに秀でたヒロイン初江は、「伊勢神宮の神に仕える人間としての側面」を持ち、天照大神を伊勢の地に奉遷した倭姫命になぞらえることができること、また新治には倭建命のもつ「荒魂」がはらまれていることを指摘する。「禁色」と「潮騒」

は発表が一年と違わず、冒頭でも触れた、海外旅行先の一つ、ギリシャの影響を強く受けていることも同じである。とすれば両者に「伊勢」が関係することもまた偶然ではないように思われる。

伊勢志摩は、美しい自然に恵まれ、《歌枕》の地としても名高いところである。また、全国約八万社を統括する神社本庁の本宗であり、皇室の宗廟たる伊勢神宮を有し、日本の歴史文化の中心的な場所である。伊勢神宮には、天照大神が祀られており、三種の神器の一つ、八咫鏡を御神体としている。その起源は、第十代崇神天皇の御代に疫病が流行し、その原因をそれまで宮中に共に祀られていた天照大神と倭大国魂神の神威によるものではないかと畏れた天皇が、皇女豊鍬入姫命に命じて天照大神を鎮座する地を求めさせたことに由来すると言われている。豊鍬入姫命は大神を倭の笠縫邑に遷しこれに仕え、後を継いだ垂仁天皇皇女倭比賣命⁽¹⁶⁾が、大神の「御杖代」として諸国をまわり、神託を受けた伊勢の地に神宮が創建された。

倭比賣命は、かの有名な倭建命の叔母にあたり、倭建命が父景行天皇に命ぜられた危険な征討に対して影ながら助力をした人物である。三島の、日本古典文学に対する知識と愛着は今更言うまでもないが、とりわけ、「古事記」や

「日本書紀」にみられるこの倭建命の挿話には思い入れがあったようだ。それは東大全共闘との討論⁽¹⁷⁾や、評論随筆「日本文学小史」⁽¹⁸⁾の中で繰り返し言及していることや、これを題材にした「青垣山の物語」という小説を書いていることから伺える。

ここで、蛇足ではあるが、「古事記」「日本書紀」における記述をもとに、今一度、倭建命の物語を追ってみた。「纏向之日代宮」（現在の奈良県櫻井市）に都を遷し天下を治めていた倭建命の父景行天皇は、ある時大根王の二人の娘、兄比賣、弟比賣が非常に美しいことを知る。そこで二人を宮中へ連れてくるべく倭建命の兄、大碓命を遣わすのだが、大碓命は美しいこの二人の姉妹と勝手に結婚してしまい、あまつさえ父景行天皇には別の女をこの二人の姉妹と偽って差し出す。このような大碓命の所行に、景行天皇は気分を害されたものの、特に咎めることはしなかった。しかしこの成行を苦々しく思っていた倭建命は、ある日父景行天皇に、朝夕の食事の陪席をしない兄大碓命を陪席させるよう命令され、（景行天皇は食事に出るよう告げただけなのだが、命は）便所に入っていた兄の手足を引き抜いて殺してしまう。これを聞いた天皇は命の強暴さを畏れ、西国に派遣し、熊曾建の兄弟を討つよう命じた。この時、命

に自分の衣裳を与え助力したのが倭比賣命である。「古事記」には次のようにある。

於是天皇、惶_レ其御子之建荒之情_二而詔之、西方有_二熊曾建二人_一。是不_レ伏无_レ禮人等。故、取其人等_二而遣_一。當_レ此之時、其御髮結_レ額也。爾小碓命、給_レ其姨倭比賣命之御衣御裳、以_レ劔納_レ于_二御懷_一而幸行。故、到_レ于_二熊曾建之家_一見者、於_レ其家邊_二軍圍_三重_一、作室以居。於是言_二動爲_レ御室樂_一、設_二備食物_一。故、遊_レ行其傍、待_二其樂日_一。爾臨_二其樂日_一、如_二童女之髮_一、梳_二垂其結御髮_一、服_二其姨之御衣御裳_一、既成_二童女之姿_一、交_二立女人之中_一、入_二坐其室內_一。爾熊曾建兄弟二人、見_二感其孌子_一、坐_レ於_二己中_一而盛樂。故、臨_二其酣時_一、自_レ懷出_レ劔、取_二熊曾之衣衿_一、以_レ劔自_二其胸_一刺通之時、其弟建、見畏逃出。乃追至_二其室之椅本_一、取_二其背皮_一、劔自_レ尻刺通。

「日本書紀」で「容姿端正」と表現されている命は、この叔母から貰った衣裳で女装をし、油断した熊曾建兄弟を首尾よく征伐した。しかし戻ってみると、今度は東国の平定を命じられてしまう。西征からいくら経たないうちに、

また危険な東伐を命じられた命は、道中伊勢神宮に立ち寄って倭比賣命に、父景行天皇はこの私を死んでしまえとお思っているのではないだろうかと嘆く。この件は「古事記」に以下のように記されている。

爾天皇、亦頻詔倭建命、言「向_レ和平東方十二道之荒夫琉神、及摩都樓波奴人等_二而_一、副_三吉備臣等之祖、名御鉏友耳建日子_二而遣之時、給_三比比羅木之八尋矛_一。比比羅三字以_レ音。故、受_レ命罷行之時、參_二入伊勢大御神宮_一、拜_三神朝廷_一、即白_二其姨倭比賣命者_一、天皇既所_二以思_三吾死_一乎、何擊_二遣西方之惡人等_一而、返參上來之間、未_レ經幾時、不_レ賜_二軍衆_一、今更乎_二遣東方十二道之惡人等_一。因_レ此思惟、猶所思_二看吾既死_一焉。患泣罷時、倭比賣命、賜_二草那藝劍_一、那藝二字以_レ音。亦賜_二御囊_一而、詔_二若有_三急事_一解_中茲囊口_上。

そんな倭建命に倭比賣命は「草那藝劍」と「囊」を授け、この力によって命は危機を脱することができたのだった。先に少し触れたが、三島の書いた「青垣山の物語」は、この倭建命の生涯を描いた作品である。末尾部分の原稿が欠損している未発表作品だが、東文彦宛や清水文雄宛の書

簡にその名が散見され、執筆時期もほぼ特定できる。まず起筆は、昭和十七年二月十六日の東文彦宛書簡「今日から「青垣山の物語」といふ日本武尊の物語をかきはじめてをります。これは題材が事実ゆゑ案かと存じます」とあることから分かる。同様に攔筆は、同年四月二十五日の清水文雄宛書簡「『青垣山の物語』甚だ不出来乍ら、完成勿々御送り申し上げました。御高覧下されば幸甚に存じます」という内容から把握できる。この物語は約二ヶ月で完成していたようである。しかし、同年九月一日には「何やかやいそがしくまだ「青垣山の物語」の改修がすんでをりませんので、出来ましたら早速病院の方へお送り申し上げます」と東に書き送っているため、その後も加筆修正はしていたようだ。この作品については、昭和十七年六月三日付清水文雄宛書簡に「『青垣山の物語』は弁解がましうございしますが、私のシルレルのな面の所産としてごらんいたゞけませんでせうか。ある点では花ざかりの森より自信のある作品でございします」と記していることや、その前後の清水宛書簡（同年五月七日、七月二十三日、三月十五日）などに重ねて講評を求めていること、また完成後も加筆修正をしていることからみて、かなりの思い入れと自信があつた事が伺える。その「青垣山の物語」では、命と倭比賣命の関係が次のよ

うに描かれていた。

尊の御生涯に、慈母のやうな役割をおつとめになつた御姨倭比賣命は、御年十六の少年武人のおもとのまゝに、御自身の衣装をば御饒別におくりたまつた。寡黙にして理由を仰せられぬ甥の宮の御胸ぬちを、姨はすでに見抜いてをられたのではなかつたか。強ひて理由をお質しにもならず御みづからの衣装を甥の宮にさづけたまうたとき、お若く美しい姨君のおんなこは、麻のやうなすずしいきよらかさのうちに、御祈念と御いつくしみとの鬚鬚たる影をゆらめかせつゝ、しかも神のおん戒めのきびしさを示して御簪のやうにもえたつてをられたのではなかつたか。そのおん眼差を受けられた御年十六の総督の宮のお兒は、さながら信仰そのもの、やうに美しく照り映え、戒めへのちからづよい御肯定を示されながら、いつぼういたいたしいばかりの悲壮なときめきを胸いつばいに羽搏せてをられたのだ。……これほどに高くたつとい黙契を相かよはせ、すべての運命への殺い肯定をしめしてゐられる、ふたつの御心の交流と対面の場合にはきつとなにか霧のやうな神界の空氣がいつしか漲つてゐたにちがひ

ない。

しじゅう尊のおん宿命に、ほとんど神のやうな役割をおつとめになり、未来のはうへいつも自然をこえた燭のひかりをお掲げになり、すゑすゑまでを知りつけてをられながら、なにか神さびた沈黙をじつと守りつけてゐられたあの倭比賣命こそ、そのやうな尊の御悲劇のねざしてゐる深いゆゑんを何人よりも明らかに了解されたお方ではなかつたらうか。

倭建命は「父帝の御氣色を察して、その行為によつて逆に父帝の内にひそんでゐた神的な殺意を具体化し、あまところなく大御心を具現し」た。にもかかわらず、その「純粹無垢」な行動が天皇を畏れさせたという悲劇的な運命を背負つた命は、「あらゆる苦悩にたへて」「孤高の彷徨」を続けることになる。「若く美しい」倭比賣命は、その「すゑすゑまでを知りつくして」いながらも「沈黙をじつと守りつゞけ」、「慈母のやうな」役割を以て命を守ろうとしたのである。

再び「禁色」に戻つて考えてみたい。悠一も、「異性愛の原理、あの退屈で永遠な多数決原理」に支配されている社

会に対して苦痛を感じる一方で、男色の社会に対しても「厭離の心」を抱かざるを得ず、どうしようもない「苦しみ」と「孤独」を抱えていた。

『よしんばこの青年と一緒に出かけても』と悠一は盃をみつめながら、考へた。『何一つ新しいものはなく、依然独創性の要求は充たされないことがわかつてゐる。男同士の愛はどうしてこんなに果敢^{はか}ないのか。それといふのも、事の後に単なる清浄な友愛に終るあの状態が、男色の本質だからではないのか。情欲がはててお互ひが単なる同性といふ個体にかへる孤独な状態、あの状態を作り上げるために賦与へられたたぐひの情欲ではないのか。この種族は、男であるがゆゑに愛し合ふ、と思ひたがつてゐるが、実は残酷にも、愛し合ふが故にはじめて男であることを発見するのではないのか。愛する以前のこの人たちの意識には、何かひどくあいまいなものがある。この欲望には、肉慾といふよりも、もつと形而上学的欲求に近いものがある。それは何だらう?』

ともあれ彼が、いたるところに見出すのは厭離の心である。西鶴の男色物の恋人たちは、出家か心中にし

かその帰結を見出さない。

「禁色」では、悠一のこの「苦しみ」と「孤独」を解決することなしに、幕切れがなされている。俊輔の死によって多額の遺産を手にながらも、はたして彼が「男色という倒錯した性を持ち続けたまま悠一はやすやすと市民社会の一員へと変身をとげていく」、あるいは「自らの異形な美の認識者からの束縛から解かれ、正常という名の俗の中へ身を潜める自由を味う」⁽²⁾かどうかは大いに疑問である。ただ一時的にせよ、その「苦しみ」から彼を救ったのが鎬木夫人だったのだ。「すべてを知つてすべてを恕してゐる」夫人は、倭建命の挿話における倭比賣命の存在と重なるものがあるだろう。倭比賣命は倭建命を一時的に助けはしたが、結局その悲劇的な運命から救うことは出来なかつた。その点においても両者の共通性が伺われるのである。また、倭建命に試煉を与える景行天皇と、自らの復讐のために悠一を試練（「異性愛」「同性愛」）の社会へ押し出す俊輔の間に多少の類似を見ることができよう。つまり「禁色」の俊輔、悠一、鎬木夫人という関係の祖型は、「記紀」における、景行天皇、倭建命、倭比賣命のそれに辿ることが出来るのである。

三、「禁色」の先へ

ここまで、「禁色」の「精神上の」父母と息子の関係について分析し、その祖型を記紀に辿ってみた。次にこの点を、「禁色」以外の、疑似親子を扱ったテキストで検証してみたい。

「豊饒の海」と「禁色」の間にはかなり時間差があるが、類似点が非常に多い。例えば、「豊饒の海」四巻にわたり主人公達の転生を見守る本多と俊輔との類似性については山折哲雄²²⁾の「作者の筆が、そのような本多の姿を遠景から近景へとしだいに焦点をしばって描いていくとき、あの『禁色』の老作家・檜俊輔を祖上にのせたときのと全く同じ情熱的な喜びと軽やかな饒舌に、作者が酔い痴れていることを知られるのである」といった指摘がある。また、「春の雪」や「奔馬」に見られるように、年上の女性と転生者との関係なども似通っている。

「奔馬」の主人公飯沼勲と本多が出会ったのは、「大神神社」であった。

官幣大社大神神社は、俗に三輪明神と呼ばれ、三輪山自体を御神体としてゐる。三輪山は又単に「お山」

と称する。海拔四百六十七メートル、周囲約四里、全山に生ひ茂る杉、檜、赤松、椎などの、一本たりとも生木は伐られず、不浄は一切入るをゆるされない。この大和国一の宮は、日本最古の神社であり、最古の信仰の形を伝えてゐると考へられ、古神道に思ひを致す者が一度は必ず詣でなければならぬお社である。

三輪神社は崇神天皇の御代に、疫病を憂いていた帝が神託を受けて、三輪氏の祖である意富多多泥古を祭祀主として大物主大神を祭らせたのが始まりと言われている。崇神朝での疫病の流行は、天照大神を宮中から笠縫邑に遷しただけでは治まらず、最終的には三輪神社に大物主大神を祭ったことで終結したとされる。なお天照大神を祭る地を探す旅は、疫病終結後も続き、先に述べたように約六十年の歳月を経て、倭比賣命によって伊勢の地に定められたのである。ところでこの、三輪山の山麓には崇神天皇の〈師木水垣宮〉、垂仁天皇の〈師木玉垣宮〉、景行天皇の〈纏向之日代宮〉と三代に渡り都が置かれ三輪王朝とよばれていた。中でも崇神天皇陵〈行灯山古墳〉と景行天皇陵〈渋谷向山古墳〉はこの地にある。伊勢神宮と三輪神社は、崇神朝での疫病流行を沈めるといふ共通の役割を果たしていた。

つまり、景行天皇、倭建命、倭比賣命といった人物を語る上で、伊勢と三輪は重要な地と言えるのである。⁽²³⁾

さて本多は、大神神社で勲の剣道の試合を見た時点では、彼がかつて松枝家の書生であつた飯沼茂之の息子であるということしか知らなかつた。しかしその後、三輪山に登り、勲と再会して共に滝に打たれていた時にあの黒子を目撃する。この、転生の可能性に気づく契機となつた三輪山での場面は次のように記されている。

禁足地の裡は、樹々も、羊齒^{しだ}や笹叢^{ささむら}も、これらに万遍なく織り込まれた日光も、すべてが心なしか尊く淨らかに見えた。猪が掘つたあとだといふ、一本の杉の根方の鮮やかな土の色からも、記紀に異部族の化身として現はれる古代の猪が思ひ描かれた。

しかし、自分の足が踏みしめてゐるこの御山自体が、神、あるひは神の御座^{みま}だと感じることは、それほど納得しやすい感情ではなかつた。

ここから、倭建命の東征における挿話を連想するのは容易だ。命は、美夜受比賣と結婚した後、伊吹の山の神を討伐するため、比賣の元に「草那藝劍」を置いて出かけた。

於是詔、玆山神者、徒手直取而、騰其山之時、白猪逢于山邊。其大如牛。爾為言舉而詔、是化白猪者、其神之使者。雖今不殺、還時將殺而騰坐。於是零大水雨、打惑倭建命。比化白猪者、非二其神之使者、常其神之正身、因言舉見惑也。故、還下坐之、到玉倉部之清泉以息坐之時、御心稍寤。故、號其清泉、謂居寤清泉也。

命は、神自身の化身であつた猪を、神の使いだと勘違いし、憚ることなく神意を述べたためその怒りを買ひ、激しい氷雨を浴びることになる。

この他にも勲の荒ぶる魂や、天皇への報われない「忠義」など、両者に共通する部分が多い。「奔馬」では真杉海棠の練成会において、「禊ぎのあとで獸血」を得ようとした勲の荒々しい行為について、素戔鳴尊の行為をなぞらつたものだとして説明している。しかしながら彼の荒ぶる魂の行為は、日本の窮状を正し「皇国を本来の姿に戻す」ため「ただ、命を捨てて、大御心にぞ」という確固とした信念に基づくものであつた。行為はすんでの所で露呈し、裁判という天皇から遠くはなれたところで「忠義」は潰された。決して報われることはなかつたが、その有り様は、自由奔放な

振る舞いと乱行によつて高天の原を追放された素戔鳴尊というよりも、「天帝の御氣色を察し」兄大碓命を虐殺することとで「あますところなく大御心を具現」化しようとした倭建命のものに近いと言えよう。倭建命の「忠義」もまた、報われることはなかったのである。

次に、檣子について見てみたい。歌人として名の知れた退役陸軍中将鬼頭謙輔の娘檣子は、齡三十二、三歳の物静かな美女である。訳あつて婚家から出戻り、今は亡き母に変わつて家のことに携わっている。若い者が家に遊びに来て、ご飯を食べていくことを喜ぶ父の意を汲んでいつ訪ねても快く迎えてくれ、「一視同仁の態度」を崩すことなく、「やさしく、母性的な慈愛」で勲や相良らを見守る、マドンナ的存在だった。檣子は、勲たちの「神意の戦ひを司る巫女」として皆に位置づけられていたわけだが、計画を露呈させ、失敗に終わらせたのはなんとその「巫女」役の彼女であった。死を覚悟した計画の前に檣子に会いに行つた勲は激情に駆られて決行日を洩らしてしまう。檣子はその事実を勲の父に知らせ、彼が息子²⁴の計画を警察に告げたことで、勲たちは逮捕されることになった。檣子は勲たちを裏切つた。一方で、裁判になると、勲は直前になつて翻意したという旨が記された偽りの日記を証拠として提出し、偽

証をしてのける。偽証が明らかになれば共犯をも問われかねない危険も顧みず、まさに勲の「命を救ふために全てを賭け」たのだ。果たして檣子の賭けは成功し、勲は刑を免除され釈放される。倭比賣命が全てを知り全てを見守り、そして倭建命を助けようとしたように、檣子も全てを知り全てを見守り、そして勲の「命を救ふために全てを賭け」た。しかし檣子は倭比賣命のように「無私」によつて彼を救つたわけではなかった。彼女は怖ろしいまでの「私」によつて勲を救つたのだ。鎬木夫人の場合も『母性のエゴイズム』による救済²⁴であつたが、彼女によつて悠一は一時的にせよ救われている。一方檣子の場合、その母性が、勲にとつての「呪縛」となつてしまつてゐるのだ。夫人も檣子も、母性と、その裏に見え隠れする女性、その双方の中間で闘ぎ合う。「禁色」においては、母性に比重がかつていたが、「奔馬」ではそれが女性の方へ移つていく。

「禁色」では、悠一の、異性愛社会には勿論のこと、同性愛社会においても居場所がないという悲劇はさほど追及されず、ハッピーエンドとも、そうでないとも言ひ切らないまま物語が閉じられている。これに対し、「奔馬」の飯沼勲は、「忠義」を尽くしながらも報われることのないまま死を選ぶという、悲劇的運命を辿つた。悠一に比べ勲には倭建

命に見られる悲劇的運命が強く投影されていると言える。⁽²⁵⁾

一方「禁色」の鑄木夫人は「私」を押し殺した「自己放棄」の「愛」で悠一を守り、「奔馬」の鬼頭槇子は「私」の為に歟を救った。同じエゴイズムによる母性の発露だが、エゴの強度は鑄木夫人に比べ、槇子をはるかに強い。この二作品の間に見られる変化から、母（性）という枠の中に押し込められた女（性）の復権を読みとることもまた可能であるように思われる。

おわりに

野心的失敗作と言われる「禁色」だが、そこには三島文学を通底するテーマが盛り込まれている。本稿では、それを「精神上の」父母と息子という疑似親子関係に見定め、分析を行った。俊輔、悠一、鑄木夫人の三者を疑似親子とすると、そこから見えてくるのは、「選択縁⁽²⁶⁾」としての「親子」のあり方である。俊輔と鑄木夫人は悠一を中心にそれぞれ、「精神上の」父と母の役割を担っているが、悠一と俊輔（父子）、あるいは悠一と鑄木夫人（母子）という関係は成立しても、それらが組み合わせられて「家族」という形態を取ることは決してない。鑄木夫人は自らの感情を押し殺し、母という役割を全うすることで悠一の危機を救い、彼

の「精神上の」母と成り得た。一方俊輔は金を使い、悠一の「精神上の」父たる権利を得ている。すなわち「禁色」に見る疑似親子とは、息子にとつて都合のよい人々との関係であり、しかもいつでも解消可能なものである。このような「精神上の」親子関係は、三島が好んだ、記紀における倭建命の挿話にその祖型を求めることができ、そしてまたこれは「禁色」以後のテクストにも継承されてゆく。「禁色」から「奔馬」への、ヒーローは「悲劇的運命」を濃くし、ヒロインは母性を乖離させていく、という過程には、三島の、近代家族に対する懷疑が反映されているように思われる。「家族」という濃密な関係を回避するものとして、疑似親子という形を模索したものの、最終的にはそれも幻想にすぎなかったという、三島の諦念と受け取ることができようか。

最後に、今後の課題について少し触れておく。従来の「禁色」論では、ギリシヤ的な思想の影響や、ワイルド「ドリアン・グレイの肖像」との類似関係などについてしばしば指摘されてきた。しかし、記紀をはじめとする日本人的思想、あるいは日本古典文学の影響については殆ど検証されてこなかった。記紀の他にも、「禁色」の思想を支える日本文学要素は幾つかあり、特に俊輔の造型について言えば、

その中心的な部分と深く関わっているように思われる。この検討は、別稿で改めて行いたい。

注

- (1) 三島由紀夫「私の遍歴時代」(昭38・1・10～5・23『東京新聞(夕刊)』)
- (2) 三島由紀夫「あとがき」(三島由紀夫作品集3『禁色』) (昭29・4 新潮社)
- (3) 奥野健男「三島由紀夫伝説」(平5・2 新潮社)
- (4) 井上隆史「『禁色』論—精神性の喜劇と芸術至上主義—」(『三島由紀夫研究』⑤ 三島由紀夫・禁色) 平20・1 鼎書房
- (5) 奥野健男(3)に同じ
- (6) 田中美代子「さまざまな変容—『禁色』序説—」(松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集I 三島由紀夫の時代』平13・3 勉誠出版)
- (7) 松本徹・井上隆・佐藤秀明編(4)に同じ
- (8) 「第一部の末尾で夫人を自殺させることは、当初のプランでもあったが、雑誌の最終回の原稿で、計画どほりに夫人を殺してから、私は早まったと思つた。この人物には書くにつれて愛着が増して来てをり、殺すには惜しい女だったからである。しかし私の小説が、この一件のみならず、何度もうプランから逸脱して作者を閉口させた例は、『禁色』二部作を以て最初とする」(2)に同じ
- (9) 三島由紀夫「禁色」(昭26・10『群像』)
- (10) 高橋新太郎「『禁色』断章」(平4・9『国文学 解釈と鑑賞』59(7))
- (11) 田中美代子「三島由紀夫 神の影法師」平6・10 新潮社) は、鎗木夫人の「率直果敢、献身的な博愛」に充ちた(悠一の)「庇護者」としての「聖なる母」像とともに、康子の「自己犠牲に目覚めたマリア的な至高性」を指摘している。
- (12) 中元さおり「三島由紀夫『禁色』における(もう一つの物語)」平20・12『広島近代文学試論』46) は、康子の「空虚な(聖母)」性と、エゴイズムに起因する夫人の「母」性(庇護)を指摘し、精神を持ちはじめた女たちが悠一の変貌を促していることを論じている。
- (13) 三島由紀夫「著者と一時間」(絹と明察) (昭39・11・23『朝日新聞』)
- (14) この他、「金閣寺」の老師と私の関係についての、「(論者注—老師は)父と同じ僧侶であり、溝口に金閣の住職になるように教唆する母に似た生命力や現実性を持つ老師は、当初は二つの金閣を統合する疑似親としての可能性も持っていた」(有元伸子・中元さおり・大西永昭「三島由紀夫『金閣寺』の原稿研究—柏木、老師、金閣—」平20・12『広島大学大学院文学研究科論集』68)といった指摘もある。
- (15) 柴田勝二「魅せられたる精神」(平14・11 おうふう)
- (16) 柴田はやマトヒメノミコトに「倭姫命」という字をあてているが、本稿では「青垣山の物語」で使用された「倭比賣

命」の字をあてることとする。また、ヤマトタケルノミコトについては「日本武尊」(「青垣山の物語」)、「討論 三島由紀夫VS. 東大全共闘」)、「倭建命」(「日本文学小史」)の両方を三島が使用しているため、ここでは「倭比賣命」に対応する「倭建命」を採用した。

(17) 三島由紀夫「討論 三島由紀夫VS. 東大全共闘―美と共同体と東大闘争」(昭44・6 新潮社)

(18) 三島由紀夫「日本文学小史」(昭44・8、同45・6『群像』)

(19) 引用は、「古事記」(「日本古典文学大系1 古事記 祝詞」昭33・6 岩波書店)に依る。以下「古事記」の引用は全てこれに依る。

(20) 山田有策「禁色」―(精神)の敗北」(昭51・2『国文学解釈と鑑賞』41(2))

(21) 石原慎太郎「禁色」 試論 描かれざるカタストロフ」(昭51・12『国文学』21(16))

(22) 山折哲雄「禁色」と「豊饒の海」―装置としての輪廻転生」(昭62・5『ユリイカ』18(5))。その他、奥野健男の「檜俊輔は、『豊饒の海』の本多に酷似している。(中略) 檜俊輔と同じく狂言廻しのヴォートランなのだ」(3)に同じ」といった指摘もある。

(23) 山中智恵子(「三輪山伝承」平7・1 紀伊國屋書店)は、伊勢と三輪の関係について「雄略期に伊勢の土着神と、大王家の祖神が出会ったのである。そしてその河内大王家の

祖神日の神は、三輪の日の神をすでに包含していた」と述べている。また、大和岩雄(『神社と古代王権祭祀』平2・1 白水社)の、「伊勢と三輪の関係は多岐にわたるが、雄略記に載る織女渡来伝承からも、雄略朝の頃、王権祭祀と伊勢・三輪との関係が推測できる」という指摘もある。

(24) 中元さおり(12)に同じ)

(25) 柴田勝二(15)に同じ)は、倭建命のもつ「荒魂」の系譜として、「潮騒」(昭29・6 新潮社)の新治、「憂国」(昭36・1『小説中央公論』)の武山、「剣」(昭38・10『新潮』)の次郎、「奔馬」(昭42・2・43・8『新潮』)の飯沼敷などを挙げている。但し本稿において論者は、倭建命と倭比賣命の疑似親子関係という観点から比較検討を行っており、柴田の指摘する系譜と一致しない部分がある。

(26) 上野千鶴子(『近代家族の成立と終焉』平6・3 岩波書店)は、「家族」崩壊の危機が叫ばれる現代の都市化社会が生み出した新しい人間関係を「選択縁」と名付けている。上野は、「父」「家長」「社員」といった役割、あるいは「妻」「母」の役割から降りて、「個人」になる場所を選択縁の社会は提供することができるとし、そこに「イエ」型でもない「ムラ」型でもない新しい人間関係の可能性を指摘する。「選択縁」とは、家族のような血縁集団や、法人のような社縁集団等、降られない、避けられない集団に対し、加入・脱退が自由で拘束性がなく、オリても不利益をこうむらないといった関係によって成り立っている。